

地域観光の「一元窓口」を担う

北海道のほぼ中央部、旭川市内より車で東へ30分ほどの東川町に会社はある。北海道



秋の東川町の田園風景

道の屋根大雪山国立公園の豊かな自然と、その恩恵を受けた肥沃な大地が広がる農業が盛んな町だ。

そんな東川町を拠点に、「グリーンツーリズム（都市と農村の交流活動）」の持つ可能性を事業化し、農業体験をはじめ、自然体験やラフティング体験、陶芸や木工体験など、地元のガイドやインストラクターと連携し、多様なプログラムの企画開発のほか、各体験プログラムを観光客や旅行会社とマッチングする地域観光の「一元窓口」としてコーディネート業務をおこなっている。

既成事実から始まった

農業体験受入れの取組み

近年の教育旅行は体験型が主流になってきており、ここ旭川周辺でも体験プログラムを希望する学校が多く、弊社でも教育旅行向けのプログラムの提供をおこなっているが、とりわけ多いのは農業体験だ。農業

地域だより

家族のようなつながりを 育む農家民泊体験

〈北海道上川郡東川町〉

有限会社アグリテック

代表取締役社長 中田 浩康

体験の受入れは平成17年よりおこなっており今年13年目を迎える。

取組みを始めたきっかけは、とある旅行会社より修学

旅行で農業体験を希望している学校があるという問い合わせを受けたことだ。その学校では田植え体験や収穫体験ではなく、その日そのときの農作業をいっしょにお手伝いし、農家の暮らしを学ぶようなプログラムを希望しており、受入れも1農家に対し4名程度の少人数で深い交流を期待。

120名の学校だったので、単純に4名班で割ると30軒あまりの受入れ農家が必要だった。ちょうど町内では地元の子どもたちを対象にした農業体験の受入れなどもおこなっていたため、協力農家も確保しやすいのではないかと旅行会社の依頼を引き受けることにした。

しかし、よその子を預かる不安や、農作業が忙しいなど、受入れ農家の確保はなかなか進まず、町やJAなどと協力しながら農家を1軒1軒訪問し、なんとか予定の農家数が集まった。

受入れにあたり協力農家および関係機関



農家が普段おこなっている畑の草取りをおこなう生徒たち

で農業体験の受入れ組織をつくる運びとなり、平成17年に管内で初となる「ひがしかわグリーンツーリズム推進協議会」が設立。旅行会社との受入れまでの調整は弊社が窓口になり、同協議会に体験を依頼するような形で受入れ体制を整備した。

受入れ研修や安全対策などの勉強会などをおこないながら、当日

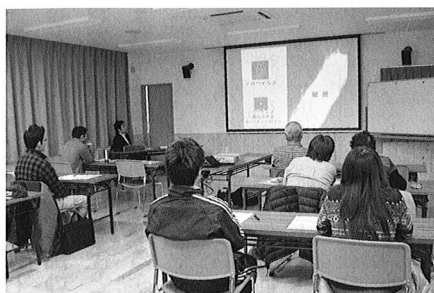
の受入れは無事終了し、旅行会社も学校も満足していただいた。その後クチコミ

で広がりを見せ、現在では近隣町村にもネットワークが広がり広域で年間15校ほど2000人あまりの受入れをおこなっている。

増える民泊需要と 不足する受入れ農家

農業体験の中でも、とくにここ数年は農家の家にホームステイする農家民泊（以下民泊）を希望する学校が多くなってきている。民泊の受入れ協力農家は約100軒ありそのうち約90軒が簡易宿所の営業許可を取得し、経営のひとつとして取組む農家も増えてきている。

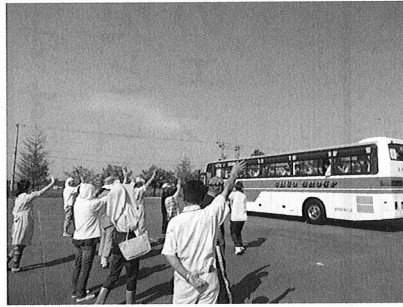
ただ、教育旅行における民泊は増えては



リスクマネジメントなど受入れ農家の勉強会



体験後の解散式では涙なみだのお別れに



「また遊びにおいで」とバスを見送る受入れ農家のみなさん



作業つなぎを着るだけでも農家になった気分になる生徒たち

いるものの、北海道では季節柄繁忙期に修学旅行が重なることが多く、作業の都合で実際の受入れ農家の稼働率は30%程度となっている。それでも毎回受入れていただいている農家もいれば、年に数軒ではあるが協力農家も微増している。

一方、活動を始めて10年以上経てば60歳



で始めた農家も70歳となり、体力的理由や各家庭の事情も変わり受入れのできない農家も増え、受入れ戸数は横ばい状態に。受入れ農家の拡大が課題となっている。

民泊では、子どもたちは同じ屋根の下で農家といっしょの共同生活を通し、農家の思いや、家族の関係、普段見えない農業の現場を知り、まるで家族になったかのようなより深い交流ができ、体験後は涙なみだのお別れになることもしばしば。

その後も手紙やメールのやりとり、最近ではSNSなどで近況を報告し合ったり、また農家で食べたご飯があまりにも美味しかったので、親にそのことを伝えると、宿泊した農家から毎年お米や農産物を購入するようになった生徒の家庭もある。さらに社会人になってお世話になった農家に遊びに来る生徒もいる。

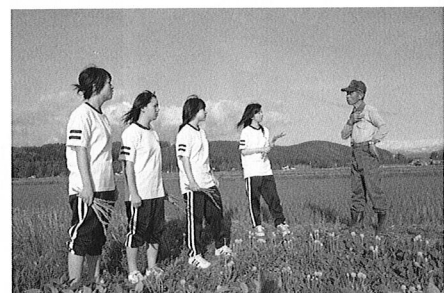
民泊を通して 家族のよつなつながり

修学旅行で訪れる生徒に限らず「農業や食は大切」とイメージはできても「農家が大事」とイメージできる人はどれだけのだろうか。食べ物はどこかの知らない場所で誰かが作っているんだ、という他人事になってしまっていないだろうか。

民泊での家族のような触れ合いは、体験後生徒たちが「農業」というコトバを目にしたたり聞いたりする度にお世話になった農家の顔を思い浮かべるはず。実際、昨年北海道

を襲った豪雨災害時には、体験をおこなった生徒より心配をする声も多々いただいた。

食べ物が生まれる場所を知り、誰がつくっているかを、知ることで、遠く感じた農山漁村をより身近に感じ、農業・農村



田んぼにて稲の育ち方について説明する受入れ農家

を自分事として考えるきっかけにもなっており、またこのような受入れは協力農家側にも日々の生産活動の励みともなっている。民泊は教育旅行のひとつの体験プログラムかもしれないが、生徒たちが体験に来ることで受入れ地域の活性化にもつながっており、引き続き協力農家の掘り起こしをおこないながら、より多くの生徒の受入れができるよう次の10年に向けて、今後も活動を続けていければと考えている。

問い合わせ
有限会社アグリテック
〒071-1154-1
北海道 上川郡 東川町 進化台 781-16
TEL 0166-821-0800
FAX 0166-821-3040
Eメール info@agritec.co.jp